特集1

生き続ける建築 —3

武田五一

Goichi Takeda

武田五一はアールヌーヴォーやゼツェッションの紹介者として、
また京都高等工芸学校(現・京都工芸繊維大学)図案科や、
京都帝国大学(現・京都大学)建築学科を創設するなど、
教育界で大きく貢献しています。
一方、建築家としても公共建築から住宅に至るまで、
時代を代表する多彩な建築作品を残しています。
海外経験が多いため、その影響も強く、建築家としての活動も独特です。
その建築姿勢は、初期に影響を受けた西欧建築思潮の実践から、
徐々に新しい建築様式へと展開していくもので、
日本の近代建築史に大きな足跡を残しました。

日常の中の前衛建築家 武田五一

石田潤一郎
JUN'ICHIRO ISHIDA

いしだ・じゅんいちろう——京都工芸繊維大学 教授／1952年生まれ。京都大学建築学科卒業。同大学院博士課程修了。滋賀県立大学環境科学部助教授を経て、2001年から現職。専攻は日本近代建築史。工学博士。
主な著書：『ブルジョワジーの装飾（日本の建築 明治大正昭和 7）』（三省堂 1980）、『屋根のはなし（物語 ものの建築史）』（鹿島出版会 1990）、『都道府県庁舎—その建築史的考察』（思文閣出版 1993）、『関西の近代建築 ウォートルスから村野藤吾まで』（中央公論美術出版 1996）、『近代建築史』（共編著、昭和堂 1998）など。

備後国福山藩7代藩主阿部正弘は20歳代半ばの若さで老中首座の地位に昇る。彼はこの後、開国か攘夷かの対立の中で日本の命運を担わされて、日米和親条約を結んで鎖国を破る当事者となる。ついには奔命のあまり、安政4年（1857）に39歳の若さで世を去る。8代、9代藩主も早世したため、福山藩は幕末維新の混乱期に際して、薄氷を踏む思いの藩運営を強いられる。この事態を乗り切るべく、有為の人材は出自にかかわらず登用されるシステムがつくられた。身分流動化の象徴といえるのが、10石扶持の下級武士から権大参事（いわば副知事格）を務めるに至った武田平之助である。平之助は廃藩置県後は、阿部家の家令職を務める一方、警察官僚から司法官となって、西日本各地を転々とする。その幕開けの明治5年（1872）に長男を設ける。他でもない、今回の主人公、武田五一である。いち早く新時代の気流をつかまえた男が父であったことと、五一が常に新しくあり続けようとしたことの間に、繋がりを見てみたい。

五一は明治27年（1894）、帝国大学（まだ東京は付かない）造家学科に入学し、建築家としての自己を形成し始める。それまでの五一についても語ることは多いが、ここでは割愛する。ただ書き付けておくべき事柄が2つある。1つは書画に趣味のあった父の感化で、早くから絵画の手ほどきを受けていたこと。もう一つは、三高の先輩に後に東京大学建築学科教授となる塚本靖［＊1］がおり、建築へ目を向けさせるきっかけとなったこと、である。

明治30年（1897）、五一は東京帝国大学建築学科（この年名前が変わった）を卒業する。卒業論文は「茶室建築」、卒業設計は「ACADEMY OF MUSIC AND CONCERT HALL」であった。卒論は茶室を系譜論的に見た最初であり、文献に基づく最近の研究の精緻さとは次元を異にするものの、この時点では実に体系だった叙述であった。また卒計は英国のクイーン・アン様式［＊2］の潮流を取り入れたものとしては前年（明治26年）の野口孫市［＊3］に次ぐ作品で、よくその骨法を理解していて、グラスゴー派［＊4］に接近する彼の未来を予感させる。パースのドローイングの巧みさは言うまでもない。

明治30年（1897）に卒業するとそのまま大学院に進学するが、伊東忠太から「台湾神社」（1899）、妻木頼黄から「日本勧業銀行」（1899）の設計の補助を依頼される。中でも「日本勧業銀行」は和洋折衷の意欲作として広く知られ、“製図監督”として紹介された五一の実力を世に知らしめることとなる。明治32年（1899）7月に東京帝国大学助教授に任官する。この年の1月に同じ意匠学の塚本靖が助教授になっているから不思議な人事なのだが、塚本の欧米留学（明治32年12月出発）が決まったので、つなぎに起用されたものと推測される。ところが五一自身がすぐに留学を命じられる。京都に高等工芸学校が設置されることになり、その図案科教授に起用されたのである。明治34年（1901）3月に出発、1年余を英国で過ごす。そこではカムデンスクール・オブ・アート・アンド・サイエンスに籍を置く。この頃、英国で行なわれていた学生向けのコンペ、英国国民図案懸賞競技に応募して「皇后賞（silver medal）」を得ている。この他にも演習課題として描かれたと思われるインテリアデザインや家具の図面が残るが、いずれもC.R.マッキントッシュらグラスゴー派の影響が色濃い。その後パリに転じ、更に明治36年（1903）2月以降ヨーロッパ各地を歴遊する。4月に立ち寄ったウィーンではゼツェッション展のポスター7点を購入している。

明治36年（1903）7月に2年4ヵ月ぶりに帰国する。既に5月には本人不在のまま、京都高等工芸学校教授に任命されており、帰国後はそのまま京都に向かう。高等工芸の同僚には浅井忠がおり、共に京都の伝統工芸の近代化を目指す遊陶園、京漆園［＊5］に参加している。“工芸”の教育者、啓発者としての五一の業績も大きいのだが、ここではそれに深入りしている紙幅はない。

語るべきは建築家としての活動である。「関西美術院」（1906）、「福島行信邸」（1907）、「清野勇邸」（1907）、「名和昆虫研究所記念昆虫館」（1907）、「京都府記念図書館」（1909）、「京都商品陳列所」（1910）と矢継ぎ早に作品を完成させている。いずれも形態の抽象化とグラスゴー派的装飾を有していて、欧米の新機運をありありと反映している。もっとも「京都府記念図書館」、「京都商品陳列所」の2作は、かなり歴史様式寄りである。大規模な公共建築を世紀末造形でまとめることが難しかったのかもしれない。この時点では五一は「ウィーン郵便貯金局」（1906）［＊6］も「ダルムシュタットの芸術家村」（1907）［＊7］も見ていない。そもそも新造形がどこまで勢威を拡大するか、その帰趨も読めない時期だった。

明治41年（1908）6月から翌年3月まで、五一は大蔵省技師の立場で国会議事堂ほかの調査のために再び渡欧する。これから戻ってきた後の五一は、ゼツェッション支持の旗幟（きし）を鮮明にする。五一がゼツェッションを評価するのは単にヨーロッパの風潮に従っただけではない。彼はいみじくも「一番自分がセセツシヨン式を好む所以」［＊8］を述べている。それはすなわち「セセツシヨンの標榜する根本主義」が「使用材料の性質を犠牲とせず、どこまでも其の材料のよき点を発揮するように努めること」にある点だと説明するのである。そして「日本的セセツシヨン式の出来上がるのは決して遠い将来ではあるまい」、「自分も努めて其の方面に向こうて奮闘してみたい」と宣言する。その言葉通り、1910年代前半には、ウィーン・ゼツェッションの影響の強い作品が続く——「同志社女学校静和館」（1911）、「求道会館」（1915）、「山口県庁及び県会議事堂」（1916）など。

しかし、1920年前後から、斬新さが主題の中心から外れていく。ゼツェッションは、ある時は歴史様式と併存し、ある時は和風と重ね合わされる。更に彼はF.L.ライトを日本にいち早く紹介し、またスパニッシュ様式導入の立て役者となる。それら新造形は確かに見慣れない形態をもたらすが、既成の建築を否定するような激しさは持っていない。歴史様式の堅苦しさ、重々しさをそっと和らげていくにとどまる。格式ではなくくつろぎを、規範性ではなく闊達さを、彼はもたらそうとしていた。

そのことと表裏をなして、五一は建築から量塊性をなくし、物質感を薄めようとした。彼は早くから鉄筋コンクリート構造に注目してきた。この新構造を用いると、レンガ造に比べて、壁体は薄くでき、かつ形態の自由度は格段に高まる。また、彼はタイル使用の先駆者であり、テラコッタ導入の唱道者でもある。薄い帳壁に表面だけの材料が張られる時、建築は奇妙に輪郭をあいまいにして、視野の中を漂う。そうした操作によって、彼はお気に入りのモチーフを駆使する自由と、穏やかに表現の幅を広げていく力を獲得した。一例を挙げよう。「京都帝国大学本館」（1925）、いわゆる時計台は合作ではあるが五一が意匠を主導したことは間違いない。そこには、東京大学「安田講堂」［＊9］のふてぶてしい存在感とも早稲田大学「大隈講堂」［＊10］の人懐っこい叙情性とも違う、乾いた明るさが漂う。

帝国大学卒業論文「茶室建築」（明治30年7月提出）
上図は東京国立博物館敷地内にある「六窓庵」の実測立面図。下図は露地の説明にあたって、一般的な外構形式の例として掲出したもの

京都帝国大学本館（現・京都大学百周年時計台記念館 1925） 武田五一の原設計を、藤井厚二や構造の坂静雄が参加してまとめた。大正期の日本建築界を席巻したゼツェッションの最後の大作というべき存在。タイル・モザイクやテラコッタ、内部のサラセン風装飾など見所は多い

［＊1］塚本 靖（1869〜1937）
建築学者。京都市出身。明治26年、帝国大学造家学科卒業。同大学助教授を経て、35年より教授。日光東照宮の調査を主導するなど、建築装飾に通暁する。また早い時期のアールヌーヴォーの紹介者としても知られる。実作には京城駅、御料車（明治天皇乗用鉄道車両）など。
［＊2］クイーン・アン様式
19世紀後半の英国における建築様式。赤レンガの壁体と反転曲線で縁取られたオランダ風の破風、上げ下げ窓などを特徴とするが、全体としてはさまざまな様式を折衷する。五一の卒計は石張りだが、ダッチ・ゲーブルや平アーチの多用に、強い影響が見える。
［＊3］野口孫市（1869〜1915）
建築家。姫路市出身。明治27年、帝国大学造家学科卒業。逓信省を経て、32年に住友に入社し、住友家須磨別邸、伊庭貞剛邸、田辺貞吉邸など住友関係の邸宅を多く手掛ける。また大阪府立図書館の設計も担当する。古典主義からアールヌーヴォーまで自在に駆使する意匠力を備えていたが、46歳で世を去る。
［＊4］グラスゴー派
19世紀末から20世紀初頭、スコットランドに興った建築・工芸運動。C.R.マッキントッシュを中心人物とし、緩やかな曲率の曲線、縦に引き延ばされたプロポーション、正方形モチーフなど、独自の造形言語を展開する。代表作にグラスゴー美術学校、ヒルハウスなど。

［＊5］遊陶園・京漆園
それぞれ京焼と京漆器の意匠の革新を目指した研究団体。前者は明治36年、後者は39年結成。浅井、武田の他、京都高等工芸学校長の中沢岩太、画家の神坂雪佳など多くの人材を糾合した。
［＊6］ウィーン郵便貯金局（1906）O.ワーグナー
［＊7］ダルムシュタットの芸術家村（1907）J.オルブリッヒ、P.ベーレンス
［＊8］武田五一「アール・ヌーボーとセセッション」（『建築ト装飾』第2巻第6号、1912年）
［＊9］東京大学大講堂（1925）内田祥三十岸田日出刀
［＊10］早稲田大学大隈記念講堂（1927）佐藤功一

大会堂　明治36年に設計に着手したが、工費難などから2度にわたって設計変更を行なっている。いすを用い、ハンマービームトラスの小屋組を現しにして、周囲にギャラリーを巡らすというキリスト教会堂的な骨格であるが、そこに六角形の厨子を壁から突出させ、卍文様の高欄を配して、特異な空間を現出させた。この無国籍性は、しかし求道学舎の創設者である近角常観が推進する仏教運動の革新性と照応する

大会堂2階ギャラリー　菩提樹を描いたステンドグラスの平明なデザインと、ボルトを殊更に強調したトラスの力感とが不思議な調和を見せる。ギャラリーは当初は畳敷きだった

求道会館

［建築概要］
所在地：東京都文京区本郷6-20-5
規模：地上2階
構造：レンガ造
竣工年：1915年
改修年：2002年

正面外観　骨格が長方形や三角形、半円といった幾何学的な形態に還元されている。半円アーチの連続や、柱と梁を分節せずに一体的に見せる手法は初期五一の好み

それは、左右対称の中軸に高塔を構える保守的な骨格を平滑なタイルで包み、そこにゼツェッションとサラセン趣味［＊11］とライト風という“新機軸”を精一杯詰め込んだ成果である。いわばどこにも帰属しない気軽さがもたらす明るさなのである。

しかし、日常性への下降は、彼のデザインから尖鋭さを薄めたことは否めない。弟子からも「先生には代表作がない」と面と向かって言われもし、B.タウトから「いかもの芸術家」［＊12］呼ばわりされたりもする。五一自身は、意にも介さずに“千変万化”の細部意匠を楽しんでいたであろう。社会は彼の甘やかな装飾と該博（がいはく）な知識とを求め続けていたのだから。ところが、五一は晩年に至って再び変わる。昭和6年（1931）、6度目の外遊に出て、ヨーロッパを巡歴する。そこで急速に地歩を固めつつあるモダニズム建築を目の当たりにする。その成果が「京都電燈株式会社（現・関西電力京都支店）」（1937）である。構造体を意識的に強調するその立面は、それまでの五一作品に見られなかった力感に富んでいる。ここで得たであろう手応えを確かめる間もなく、翌昭和13年（1938）2月、武田五一は急逝する。誰も予期しない死であったが、常に新しくあり続けようとしたその生き方は、間違いなく1つの円環を閉じたのである。❄（図版解説も筆者）

［＊11］サラセン
イスラム教徒、あるいはアラビア人。及び彼らの文化。
［＊12］『日本 タウトの日記』1934年1月30日。“T教授”と伏せられているが、前後の記述から五一であることは明らか。

博物館南西面全景　名和昆虫研究所は“日本のファーブル”名和靖（1857〜1926）が明治29年に開設した。五一は明治17年に岐阜市の華陽学校に入学し、助教諭試補だった名和と出会っている。なお、五一は高校生の頃は生物学者志望であった

名和昆虫研究所記念昆虫館・名和昆虫博物館

［建築概要］
所在地：岐阜県岐阜市大宮町2-18（岐阜公園内）
規模：記念昆虫館；地上2階、博物館；地上2階
構造：記念昆虫館；木造、博物館；レンガ造
竣工年：記念昆虫館；1907年、博物館；1919年

博物館正面外観　名和靖の還暦を記念して建設されたもの。あらゆる要素が直線と直方体へ還元されている観があり、1910年代のP.ベーレンスに通ずるものがある。一方で、車寄は様式的であり、次第に折衷性を強める傾向をうかがわせる。京都高等工芸学校での教え子である吉武東里（1886〜1945）が実施設計を担当したことが分かっている

記念昆虫館南西面全景　単純化された形態に、この時期の五一の関心がよく表れる。特に屋根窓のガラス面を外壁と同一平面で納める手法は、今見ても斬新。屋根の破風板は当初は刳形（くりかた）が施されて、より装飾的だった

左――記念昆虫館で使用されたいす　背もたれ中央にギフチョウの鱗粉転写があしらわれる
右――陶製のトンボの装飾　当初は記念昆虫館の北側出入り口上部の庇の棟に載せられていた

藤山雷太邸

［建築概要］
所在地：愛知県名古屋市御器所3-1-29
規模：平屋
構造：木造
竣工年：1932年
移築再建年：1979年

池に向かって張り出した月見台　藤山邸は元来東京都港区芝白金にあったが、昭和50年に至って取り壊しの危機に瀕した。当初は洋館と和館が並立しており、そのうち和館部を名古屋市の龍興寺に移築して、本堂として再建した

南面全景　月見台を張り出す構成は醍醐寺三宝院書院を踏まえたものといわれ、楼閣も東福寺昭堂や銀閣などを参照していると思われる。当初の施工は棟梁・魚津弘吉が担当しており、名古屋での保存が成し得たのは弘吉の紹介による。再建にあたっても魚津社寺工務店が手掛けている

客間　17畳敷きの客間に2間幅の床、2畳の付け書院を設ける。卒論で茶室を扱い、更に平等院鳳凰堂の修理を手掛けた五一の古建築の知識は正統的なものであった。ガラス戸の外に見えるのが、上の写真の月見台である

上――廊下照明器具　おっとりとした姿からは、五一がいかにも楽しんでデザインしたことが伝わってくる
下――襖引手　職方の驚くほどの技能、材料の良さ、それらを存分に発揮させる緻密なデザイン。数多い五一の作品の中でも屈指の優品であることが、この小部分からも見て取れる

武田五一 ドローイング

1

2

3

4

5

6

1　英国国民図案懸賞競技出品作品（室内意匠習作）（1902）　このコンペは“The National Competition of School of Art”のことで、英国文部省が所管する美術学校の学生を対象に、各学校での演習において提出された作品を審査し、ランク付けするものである。この年は284校から25,108点の応募があり、そこから金メダル5件、銀メダル85件、銅メダル297件などが選ばれた。このうち、五一は銀メダル「皇后賞」を得ている

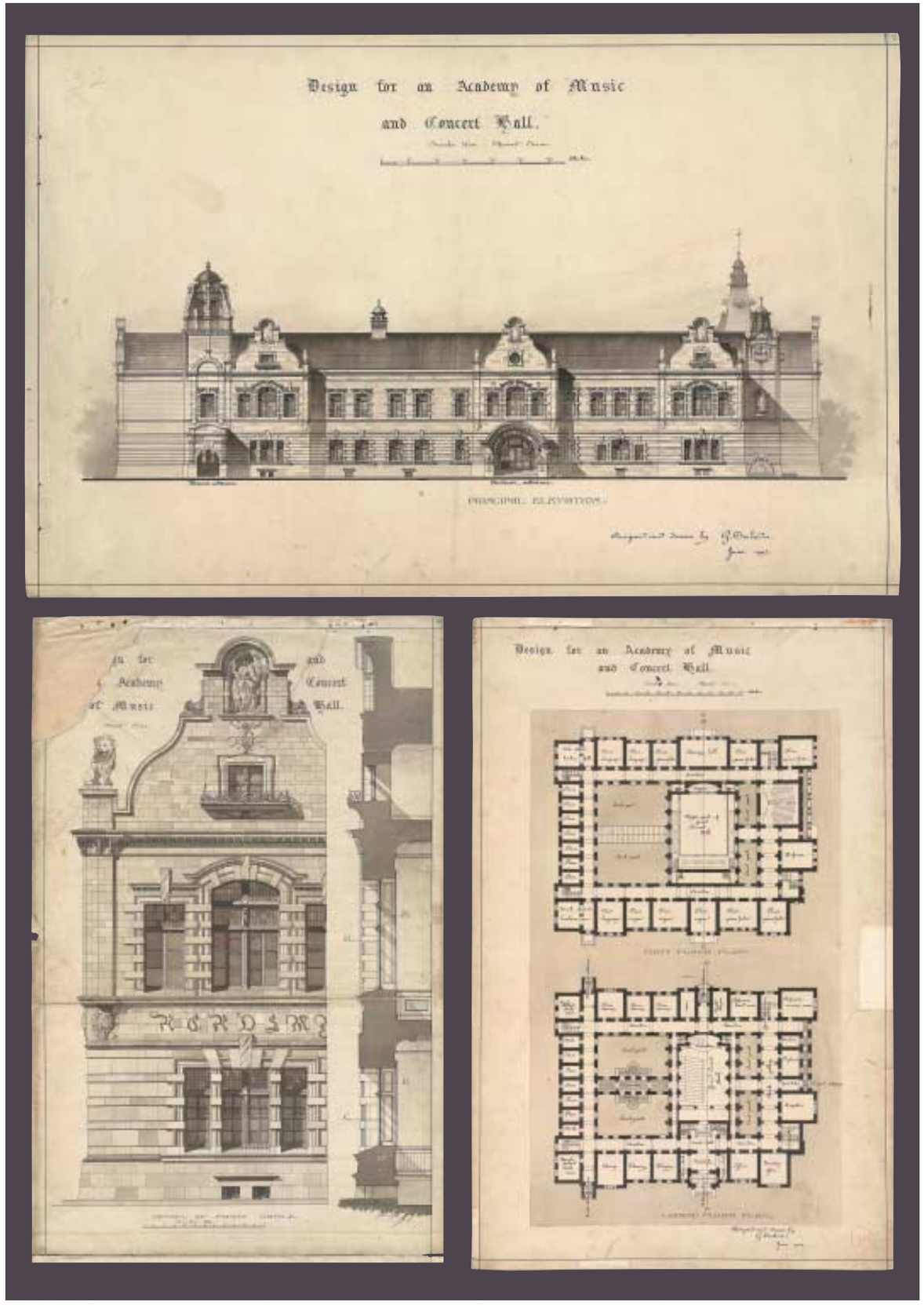
2　CHAPEL OF SORBONE：PARIS（ソルボンヌ大学チャペル）（1902）　ホテルの窓から見えるチャペルを描いたもの。フランス的なマンサード屋根の彼方に顔を出すドームが五一の旅情を誘ったことは入念な筆致にも表れる。彼は1902〜03年にかけての半年ほどは、パリを拠点としてヨーロッパ各地を視察している

3　ベッドルーム／スクラップブック2（1901）　1901年5月にロンドンに着いた五一は、6月24日にゴーウェル街45番地に腰を落ち着ける。さっそく水彩で部屋の様子を描いている

4　『名和靖氏還暦記念寄贈論文集』（1917）　名和靖の還暦を記念して、弟子の長野菊次郎が編集して刊行した書物。描かれているのは、もちろん名和が発見したギフチョウ

5　福島行信邸暖炉前飾図案（1906頃）　福島行信は明治7年生まれ。三高からロンドン大学に学び、明治32年に帰国後は貿易業で財を成す。世紀末文化に深い関心を持っていた他、妻が五一の初期の施主である清野謙次（後の京大教授）の姉であるなど、五一との接点は多かった。福島邸は“ゼツェッション”の好例として耳目を集める存在だった

6　壁紙習作（1902頃）　五一のスクラップブックには留学中に描いたと思われるテキスタイル、ロゴタイプ、食器、タイルなどのデザイン模写・スケッチが数多く残っており、彼がいかに工芸全般にわたって世紀末の息吹を吸収したかがうかがえる。この壁紙もその1つ。なお、帰国後、この種のデザインの布地をウィーンから福島行信を通じて取り寄せ、京都高等工芸学校の教材としている



帝国大学卒業設計「ACADEMY OF MUSIC AND CONCERT HALL」（1897）　左右対称の崩し方、破風の効果の出し方など、天性のセンスがうかがえる

武田五一 人と作品

1872-1938

工科大学造家学科集合写真　学生時代の武田五一（後列右端）。前列左から石井敬吉、木子清敬、辰野金吾、中村達太郎

略歴

1872年（明治5）　広島県福山に生まれる
1894年（明治27）帝国大学工科大学造家学科入学
1897年（明治30）東京帝国大学工科大学造家学科卒業。同大学大学院に入学
1899年（明治32）東京帝国大学工科大学助教授
1901年（明治34）図案学研究のため英独仏へ留学
1902年（明治35）京都高等工芸学校設置
1903年（明治36）滞欧中、京都高等工芸学校教授に転任。留学より帰国
1904年（明治37）京都府技師を兼任（～1907）
1908年（明治41）大蔵省臨時建築部技師兼任（～1913）。議院建築調査のため欧米へ出張
1914年（大正3）　巴奈馬太平洋万国博覧会出張
1915年（大正4）　工学博士
1918年（大正7）　名古屋高等工業学校長に転任。臨時議院建築局技師兼任
1920年（大正9）　京都帝国大学教授に転任
1931年（昭和6）　欧米を周遊
1932年（昭和7）　京都帝国大学定年退官
1934年（昭和9）　法隆寺国宝保存工事事務所長
1938年（昭和13）逝去（66歳）

主な作品

1899年（明治32）日本勧業銀行（東京）（妻木頼黄の設計補助）、台湾神社（台湾）（伊東忠太の設計補助）
1904年（明治37）阪田邸内記念館（東京）、京都電鉄株式会社（京都）、鹿苑寺金閣・平等院鳳凰堂修理工事（～1907）（京都）
1906年（明治39）関西美術院（京都）、園部公園忠魂碑（京都）
1907年（明治40）福島行信邸（東京）、名和昆虫研究所記念昆虫館（岐阜）、清野勇邸（京都）、隆範大僧正頌徳碑（京都）
1909年（明治42）京都府記念図書館（京都）、富山県会議事堂（富山）
1910年（明治43）京都商品陳列所（京都）
1911年（明治44）伊藤博文公銅像台座（兵庫）、同志社女学校静和館（京都）
1912年（明治45）芝川又右衛門邸（兵庫）、円山公園（京都）
1913年（大正2）　高松邸（愛知）、同志社女学校ゼームス館（京都）、二條橋（京都）、武田家墓碑（東京）
1914年（大正3）　中瀬古研究所（京都）、京阪電鉄株式会社本社（大阪）、松風邸（京都）
1915年（大正4）　京都商工会議所（京都）、求道会館（東京）、桑港博覧会日本政府館迎賓館（サンフランシスコ）、佐久間象山先生遭難之碑（京都）
1916年（大正5）　兵庫県農工銀行（兵庫）、山口県庁及び県会議事堂（山口）（設計主任）、御大典記念京都博覧会・京都駅前奉祝門（京都）、稲畑勝太郎邸（京都）、大阪朝日新聞社（大阪）（顧問）
1917年（大正6）　清水寺根本中堂・大講堂・本坊・宮殿（京都）、石山忠魂碑（滋賀）、龍安寺鳳凰閣（大阪）
1918年（大正7）　東本願寺前街路設備（京都）、河合橋（京都）、葵橋（京都）
1919年（大正8）　那覇市役所（沖縄）、山王荘（東京）（設計顧問）
1920年（大正9）　清水寺山門・鐘楼（兵庫）、自邸（京都）、桑田義備邸（京都）、名和昆虫博物館（岐阜）
1921年（大正10）山口仏教会館（京都）、春田鉄次郎邸（愛知）、京華社（京都）、兼松記念館（神戸商科大学内）、北村本邸（奈良）
1922年（大正11）京都帝国大学建築学教室（京都）、浅沼銀行（岐阜）、青柳邸（京都）、阿部伊勢守正弘公銅像台座（広島）、勝田邸（兵庫）、小川邸（京都）
1923年（大正12）東本願寺内侍所（京都）、清水寺大塔（兵庫）、山口邸（京都）、藤本ビルブローカー門司支店（福岡）
1924年（大正13）尼港遭難記念碑（東京）、高松別邸（東京）、京都銀行集会所（京都）、中之島公園音楽堂（大阪）、岐阜商工会議所（岐阜）、北村邸（和歌山）、京都市医師会館（京都）（顧問）
1925年（大正14）京都帝国大学本館（京都）（設計主任）、西尾家住宅別邸（大阪）、名柄尋常高等小学校講堂（奈良）、光明寺根本本堂（兵庫）、求道学舎（東京）
1926年（大正15）加納町役場（岐阜）、星野邸（京都）、藤井美術館（京都）、中田商店（京都）、田中別邸（京都）、持宝院大師堂（兵庫）、伏見橋（大阪）、石黒ビルディング（石川）、福山市公会堂（広島）（顧問）
1927年（昭和2）　京都市役所（京都）（顧問）、奈良信託株式会社（奈良）、大平邸（京都）、阿部伯爵邸（東京）、渡辺橋（大阪）、荻野邸（東京）
1928年（昭和3）　天王寺公園音楽堂（大阪）、芝川又右衛門邸増築（兵庫）、商工省京都陶磁器試験所本館（京都）、佐々木邸（岐阜）、大阪鉱業監督所（大阪）、岐阜市公会堂（岐阜）、大阪毎日新聞社京都支局（京都）、三井相続会館（京都）、岩倉文庫（京都）、華頂会館（京都）、京都日出新聞社（京都）、春田文化集合住宅（名古屋）、六鹿邸（京都）、御大礼京都市街路装飾（京都）（顧問）、高野山大学図書館（和歌山）
1929年（昭和4）　自邸（京都）、田蓑橋（大阪）、山代温泉共同浴場（石川）、高麗橋（大阪）、鉾流橋（大阪）、学士会京都支部会館（京都）、永平寺大光明蔵（福井）
1930年（昭和5）　河野邸（兵庫）、福山市役所（広島）、伊谷邸（京都）、高野山癸亥震災霊碑堂（和歌山）、桜宮大橋（大阪）、中山邸（兵庫）、東方文化学院京都研究所（京都）、鶴見橋（岡山）、石黒邸（石川）、山中町営共同浴場（石川）
1931年（昭和6）　賀茂大橋（京都）、熊本医科大学山崎博士記念図書館（熊本）、荒木博士銅像台座（京都大学内）、高知県立城東中学校（高知）（顧問）
1932年（昭和7）　春田文化集合住宅（第2期）（愛知）、同志社女学校栄光館（京都）、昭和橋（大阪）、藤山雷太邸（東京）、芝川又右衛門邸寿宝堂（兵庫）、京都薬学専門学校（京都）
1933年（昭和8）　円教寺摩尼殿（兵庫）
1934年（昭和9）　日本赤十字社京都支部病院（京都）、三朝大橋（鳥取）
1935年（昭和10）沢田邸（兵庫）
1936年（昭和11）黒谷金戎光明寺大方丈（京都）、法隆寺鵤文庫（奈良）
1937年（昭和12）京都電燈株式会社（京都）、法隆寺宝蔵（奈良）

取材協力・資料・写真提供
京都大学／神戸大学工学部建築系教室／財団法人名和昆虫研究所／宗教法人龍興寺／集工舎 建築都市デザイン研究所／東京大学工学部建築学科／博物館明治村／文京ふるさと歴史館／松戸市教育委員会　（50音順）

＊特に明記のない写真は、2006年11、12月に新規撮影したものです。

［次号予告］
次号（4月20日発行）の「生き続ける建築」は田辺淳吉です。